

志水千登世

（令和二年七月号）

復帰した証のひとつアルコール消毒で荒れた両手がきしむ
念入りにパタカラ体操唱和しておやつは豆腐白玉だんご
間髪を入れず二つのコール鳴る瞬時の判断力試される
息遣い確かめながら脱肛を押し戻す指、湿気を帯びる
声色はこれで良いのかKさんの死亡退所を告げる食堂
午後九時の記録に向かう静寂と不織布マスクの微かな匂い
亜熱帯気候の中にいるようだ不織布マスクの内側の皮膚
ボールペンくるりと回し中指のペットの様なペンだこ解す

●作者の言葉

黒岩剛仁先生、年間選者賞
に選んで頂き、ありがとうございます
ございました。この作品は三年
振りに高齢者施設へ仕事復帰

をした頃の歌です。職場まで
は自転車で十分。なだらかな
登り坂に息が上がります。火
の国熊本の八月の炎天下。よ
ろよろと鬼の形相でたどり着

き、ブランクを実感しました。施設では三
年の間に十一名の方が他界されていまし
た。喪失感の消えない日々。仕事の勘を取
り戻しつつも、もがいていた頃の思い入れ
のある歌です。とても嬉しく、これからの
励みになりました。

●選者の言葉

昨年七月号〜本年六月号で私が特選に選
ばせて頂いたのは、計四五人。複数回選ん
だのは、三浦政博、松元雅子、齋賀万智の
三名だった。その中の、二月号の齋賀作、
他に七月号の志水千登世作、十一月号の大
谷ゆかり作、十二月号の山口ゆかり作を候
補作として、大いに悩んだ。結果としては、
上に掲げたごとく、志水千登世作を年間選
者賞とした。

志水さんの八首は、一時離れていた職場
に復帰した（看護師さんか）、仕事の歌で
ある。その連作としての臨場感が際立って
いる上に、一首一首の独立性もきちんと確
保されている点が決め手となった。へ息遣
い確かめながら脱肛を押し戻す指、湿気を
帯びる〜

